



TITLE:

1.概要(VI 共同利用研究)

AUTHOR(S):

CITATION:

1.概要(VI 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1999, 29: 82-83

ISSUE DATE:

1999-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165289>

RIGHT:

VI 共同利用研究

1. 概 要

昭和57年以来、研究課題として「計画研究」並びに「自由研究」を併置し、昭和62年度には「資料提供」を設置した。さらに平成6年度から「所外供給」を新たに設置し、これらに係る共同利用研究が実施されている。

「計画研究」とは、本研究所内推進者の企画に基づいて共同利用研究者を公募するもので、個々の「計画研究」は3～5年の期間内に終了し、まとめた成果を公表する。

「自由研究」とは「計画研究」に該当しないプロジェクトで、応募者の自由な着想と計画に基づき所内対応者の協力を得て、継続期間3年を目処に研究が実施されている。

「資料提供」とは、資料（体液、臓器、筋肉、毛皮、歯牙・骨格、排泄物等）の提供及び図書や標本類を参照する共同利用研究として実施されている。

「所外供給」とは、本研究所以外の研究機関で行うことがより適切な研究のために、生体のサルを所外に供給するものである。

平成10年度の計画課題、応募並びに採択状況、研究会等の概略は以下のとおりである。

(1) 計画研究

(実施予定年度：課題推進者、下線は代表者)

1. ニホンザルの採食生態と社会関係に関する比較研究

平成8～10年度：山極壽一・杉山幸丸・森 明雄・大澤秀行・松村秀一

ニホンザルの生息環境の定量的把握を行った上で、各地のニホンザル野生群を中心に採食生態と集団間、集団内の社会関係を調査し、環境条件の相違によって行動特性、個体間や集団間関係に生ずる種内変異を分析するとともに、多様な環境に生息するニホンザルの可塑性に富む採食戦略、社会構造のモデルを再考する。

2. 霊長類の静的機能形態学

平成8～10年度：茂原信生・毛利俊雄

解剖を主たる手段として、各種霊長類のおも

に軟部形態の特徴を記載し、その機能的意義を明らかにする。とくにロコモーション、表情、発声、循環器系等に関する研究を重視する。発生・成長の途上にある標本の研究も含む。

3. 霊長類におけるストレス反応に関する研究

平成8～10年度：鈴木樹理・大蔵 聡・友永雅己・中村 伸

霊長類におけるストレス反応について、多面的な研究を行う。物理的のみならず、霊長類に特有な心理的、社会的ストレスに対する生理学的変化や心理学的、行動学的変化の分析、定量を試みる。またストレス反応時の神経・内分泌・免疫系の相互のかかわり合いを解明する。

4. 霊長類の発生・発達・加齢に関する研究

平成9～11年度：林 基治・小嶋祥三・泉山 節・濱田 穰・中村克樹・清水慶子・大蔵 聡

霊長類の発生・発達・加齢にともなう遺伝子、細胞、器官、組織における変化を調べるとともに知覚、認知、学習、行動等個体レベルの変遷過程を明らかにし、霊長類の個体発達の特徴を考察する。

5. ヒヒとマカクの比較生物学

平成9～11年度：庄武孝義・川本 芳・平井啓久・相見 満・松林清明

これまでの研究で霊長類の分類群間の遺伝距離は他生物群のそれに比べて著しく小さいことが指摘されている。ここでは、ヒヒとマカクに焦点をあて両者の遺伝学的、形態学的、生理学的等のそれぞれの特徴を検索し、上述した霊長類の分類学的特殊性が何に起因しているかを探る。

6. 霊長類などの寒冷適応に関する研究

平成10～12年度：片山一道・山極壽一・川本 芳・相見 満・渡邊邦夫・毛利俊雄・松林清明

霊長類などの動物種が本来の生活環境を離れ

て、特異な生活条件に拡散しとき、あるいは生活を余儀なくされたとき、いかなる適応戦略を採るか。できれば寒冷適応の問題に絞って、形態、生理、生態、行動などの変化の実態、その要因と機構を解明していく。

7. 霊長類における認知と記憶の特性とその脳内機構の研究

平成10～12年度：三上章允・松沢哲郎・櫻井芳雄・中村克樹

霊長類はすぐれた認知、記憶の能力を持ち、その特性と脳内機構の研究は霊長類学における重要課題の一つである。本研究課題では、心理学、神経生理学、神経組織学、神経化学の手法を用いてこの問題の解明に取り組むとともに、サルやチンパンジーをヒトとの比較において考察する。

8. 類人猿の認知行動発達と比較研究

平成10～12年度：松沢哲郎・友永雅己・小嶋祥三・濱田 稔

類人猿の認知行動の発達過程を形態学的、生理学的研究と関連させ幅広い視点で研究する。特に姿勢・運動・知覚・認知・コミュニケーション、社会的知性などに焦点をあて、類人猿を特徴づける認知機能や行動の特性とその発達過程を、他の霊長類種と比較しつつ検討する。

(2) 応募および採択状況

平成10年度のこれらの研究課題について、105件(171名)の応募があり、運営委員会共同利用研究専門部会(丸橋珠樹、和 秀雄、小嶋祥三、竹中 修)並びに共同利用研究実行委員会(森 明雄、三上章允、大蔵 聡、片山一道、浅岡一雄)との合同会議において採択原案を作成し、協議委員会(平成10年2月12日)の審議・決定を経て、運営委員会(平成10年3月10日付け持ち回り会議)で了承された。

その結果、101件(163名)が採択された。各課題についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課 題	応 募	採 択
計画研究 1	4件 (5名)	3件 (3名)
2	10件 (16名)	7件 (10名)
3	5件 (11名)	4件 (6名)
4	9件 (15名)	9件 (15名)
5	2件 (2名)	2件 (2名)
6	3件 (6名)	3件 (6名)
7	4件 (9名)	4件 (9名)
8	2件 (3名)	2件 (3名)
自由研究	46件 (73名)	42件 (64名)
資料提供	12件 (19名)	18件 (34名)
所外供給	8件 (12名)	7件 (11名)

(3) 研 究 会

平成10年度は、以下のとおり4件の研究会が採択・実施された。

1. 霊長類などの寒冷適応に関する研究

平成10年5月14日～15日

片山一道・川本 芳・相見 満・渡邊邦夫・毛利俊雄・松林清明

2. アフリカ大型類人猿の研究・飼育・自然保護

平成10年11月19日～20日

松沢哲郎・小嶋祥三・松林清明・竹中 修・友永雅己・杉山幸丸・加納隆至・西田利貞

3. 第28回ホミニゼーション研究会「人間と家畜」

平成11年3月17日～18日

川本 芳・茂原信生・庄武孝義・片山一道・清水慶子・友永雅己

4. ニホンザルの採食生態と社会関係に関する比較研究

平成11年3月19日～20日

杉山幸丸・松村秀一・森 明雄・大澤秀行